第２講　共通テスト第２日程 第３問

第３問

次の文章は、『山路の露』の一節である。男君との恋愛関係のもつれに悩んで姿を消した女君は、やがて出家し、ある山里でひっそりと暮らしていた。女君の生存を伝え聞いた男君は、女君の弟（本文では「童」）を使いとして何度か手紙を送ったが、女君は取り合わなかった。本文は、あきらめきれない男君が女君の住む山里を訪ねる場面から始まる。これを読んで、後の問い（**問１～５**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

夕霧たちこめて、道いとたどたどしけれども、深き心をしるべにて、急ぎわたり給(たま)ふも、(ア)かつはあやしく、今はそのかひあるまじきを、と思(おぼ)せども、ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がるる御心地になむ。浮雲はらふ四方(よも)の嵐に、月なごりなうすみのぼりて、千里(ちさと)(注1)の外(ほか)まで思ひやらるる心地するに、いとど思し残すことあらじかし。山深くなるままに、道いとしげう、露深ければ、御随身(ずいじん)いとやつしたれどさすがにつきづきしく、御前駆(さき)の露はらふ様もをかしく見ゆ。

メモ欄

かしこは、山のふもとに、いとささやかなる所なりけり。まづかの童（わらは）を入れて、案内（注2）み給へば、

「こなたの門だつ方は鎖（さ）して侍（はべ）るめり。竹の垣ほしわたしたる所に、通ふ道の侍るめり。ただ入らせ給へ。人影もし侍らず」

と聞こゆれば、

「しばし音なくてを」

とのたまひて、我ひとり入り給ふ。

小柴（こしば）というもの(イ)はかなくしなしたるも、同じことなれど、いとなつかしく、よしある様なり。妻戸も開（あ）きて、いまだ人の起きたるにや、と見ゆれば、しげりたる前栽（せんざい）のもとよりつたひよりて、軒近き常磐木（ときはぎ）の所せくひろごりたる下にたち隠れて見給へば、こなたは仏の御前なるべし。名香（みやうがう）（注3）の香（か）、いとしみ深くかをり出でて、ただこの端つ方に行ふ人あるにや、経の巻き返さるる音もしのびやかになつかしく聞こえて、しめじめとものあはれなるに、なにとなく、やがて御涙すすむ心地して、つくづくと

メモ欄

見ゐ給へるに、とばかりありて、行ひはてぬるにや、

「いみじの月の光や」

とひとりごちて、簾（すだれ）のつま少し上げつつ、月の顔をつくづくとながめたるかたはらめ、昔ながらの面影ふと思し出でられて、いみじうあはれなるに、見給へば、月は残りなくさし入りたるに、鈍色（にびいろ）（注4）、香染（かうぞめ）などにや、袖口なつかしう見えて、額髪（ひたひがみ）のゆらゆらと削（そ）ぎかけられたるまみのわたり、いみじうなまめかしうをかしげにて、かかるしもこそらうたげさまさりて、忍びがたうまもりゐ給へるに、なほ、とばかりながめ入りて、

「里わかぬ雲居の月の影のみや見し世の秋にかはらざるらむ」

と、しのびやかにひとりごちて、涙ぐみたる様、いみじうあはれなるに、まめ人（注5）も、さのみはしづめ給はずやありけむ、

「ふるさとの月は涙にかきくれてその世ながらの影は見ざりき」

とて、ふと寄り給へるに、いとおぼえなく、化け物などいふらむものにこそと、むくつけくて、奥ざまに引き入り給ふ袖を引き寄せ給ふままに、せきとめがたき御気色（けしき）を、

メモ欄

さすが、それと見知られ給ふは、いと恥づかしう口惜しくおぼえつつ、ひたすらむくつけきものならばいかがはせむ、世にあるものとも聞かれ奉りぬるをこそは憂きことに思ひつつ、いかであらざりけりと聞きなほされ奉らむと、とざまかうざまにあらま(注6)されつるを、のがれがたく見あらはされ奉りぬると、せむかたなくて、涙のみ流れ出でつつ、我にもあらぬ様、いとあはれなり。

（注）
1　千里の外まで ―― はるか遠くまで。
2　案内み給へば ―― 様子をうかがわせてみると。
3　名香 ―― 仏前でたく香。
4　鈍色、香染 ―― どちらも出家者が身につける衣の色。
5　まめ人 ―― きまじめな人。ここでは、男君を指す。
6　あらまされつる ―― 願っていた。

メモ欄

問１ 傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は [1] ・ [2] 。

(ア) かつはあやしく [1]

① 一方では不思議で
② 一方では不愉快で
③ 一方では不気味で
④ そのうえ不体裁で
⑤ そのうえ不都合で

(イ) はかなくしなしたる [2]

① かわいらしく飾ってある
② 崩れそうな様子である
③ 形ばかりしつらえてある
④ こぎれいに手入れしてある
⑤ いつのまにか枯れている

問２　二重傍線部「ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行く先急がるる御心地になむ」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［３］。

① 「ありし世の夢語り」には、二人の仲は前世からの縁であるはずだと、男君が夢想していたことが表現されている。

② 「だに」は「まほしう」と呼応して、男君がわずかな望みにもすがりたいような心境であったことを表現している。

③ 「語り合はせ」の「せ」は使役の意味で、男君が女君自身の口から事情を説明させようとしていることを表現している。

④ 「急がるる」の「るる」は可能の意味で、女君のためなら暗い山道を行くこともいとわない男君の決意を表現している。

⑤ 「なむ」の後には「侍らめ」が省略されているが、それをあえて書かないことで余韻をもたせた表現になっている。

問3　この文章の男君の行動や心境についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［4］。

① 女君のもとへ行く途上、先導の者が露を払いながら進むのを見て、山道の雰囲気に合う優美な様子だと思っていた。
② 童に女君の住まいの様子を調べさせたが、その童が余計な口出しをするのを不快に思い、黙っているように命じた。
③ 女君の住まいの様子が、かつて二人で過ごした場所の雰囲気によく似ているのを見て、懐かしさを覚えた。
④ 木陰から垣間見たところ、仏道修行に励んでいる女君の姿を目にし、女君の敬虔（けいけん）さに改めて心ひかれた。
⑤ 独り歌を詠み涙ぐむ女君の、可憐（かれん）な姿を目にするうちに、隠れて見ているだけでは飽き足りなくなってしまった。

問４　この文章の女君の心境についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［5］・［6］。

① 突然現れた男君を化け物だと思い込み、着物の袖をつかまれたことで、涙がこぼれるほど恐ろしく感じた。
② 目の前の相手が男君であることを知って動揺し、化け物であってくれたほうがまだあきらめがつくと思った。
③ 男君ほどつらい思いをしている者はこの世にいないだろうと世間が噂(うわさ)しているのを聞き、不愉快に感じていた。
④ 男君に見つかってしまったのは、歌を口ずさんだのを聞かれたせいに違いないと思い、軽率な行動を後悔した。
⑤ 男君に姿を見られてしまい、もはや逃げも隠れもできない状況になってしまったことを悟って、途方に暮れた。
⑥ 男君が以前とは打って変わってひどくやつれているのを見て、その苦悩の深さを知り、同情の気持ちがわいた。

問５　この文章では、「月」がたびたび描かれ、登場人物を照らし、和歌にも詠まれている。それぞれの場面についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから**二つ**選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［７］・［８］。

① ４行目「月なごりなうすみのぼりて」では、遠く離れた場所に住む女君のもとへといたる道のりを月が明るく照らし出すことで、夜の山道を行くことをためらっていた男君の心の迷いが払拭されたことが象徴的に表現されている。

② 22行目「月の顔をつくづくとながめたる」では、女君は月を見て男君の面影を重ねながら長々と物思いにふけっており、男君がいつかはこの山里まで訪ねてきてしまうのではないかと、女君が不安に思っていることが明示されている。

③ 22行目「月の顔をつくづくとながめたる」女君の横顔は、男君の目には昔と変わらないように見えたが、23行目「残りなくさし入りたるに」では、月の光が女君の尼姿を照らし出し、以前とは異なる魅力を男君に発見させている。

④ 21行目「いみじの月の光や」、27行目「里わかぬ雲居の月」と、女君が月を見て二度まで独りごとを言う場面では、仏道修行に専念する生活の中で、月だけが女君のつらい過去を忘れさせてくれる存在であったことが暗示されている。

⑤ 27行目「里わかぬ雲居の月」の歌における月は、世を捨てた者の暮らす山里までもあまねく照らすものとして詠まれており、昔と変わらないその光が、以前とは身の上が大きく変わってしまったことを、否応（いやおう）なく女君に意識させている。

⑥ 30行目「ふるさとの月」の歌は、27行目「里わかぬ雲居の月」の歌に答える形で詠まれたものだが、かつての女君の姿を月にたとえて出家を惜しんでいるところに、女君の苦悩を理解しない男君の、独りよがりな心が露呈している。

■ 共通テスト第２日程

問題番号(配点)	設　問	解答番号	正　解	配　点
第３問 (50)	1	1	1	5
		2	3	5
	2	3	2	6
	3	4	5	6
	4	5 − 6	2 − 5	14(各7)
	5	7 − 8	3 − 5	14(各7)

(注)
−(ハイフン)でつながれた正解は，順序を問わない。

第２講　共通テスト第２日程 第３問　解答